

「平成30年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	桑折町立醸芳中学校（パイロット校Ⅰ）、醸芳小学校（パイロット校Ⅱ）
推進協力校名	桑折町立睦合小学校、半田醸芳小学校、伊達崎小学校

「桑折町の15歳のめざす姿」に向けて総力をあげて

本事業を受けて2年目、「授業スタンダード」の焦点化を図り、児童生徒の目線に立って「わかる・できる授業」を実施・検証し、町内での共有化を図ってきた。

1 パイロット校の取組内容

(1) パイロット校Ⅰ（醸芳中学校）の取組について

① 指導体制の確立について

今年度は数学科1～3年のタテ持ち体制に加えて、習熟度別学習を進めた。また、数学科部会を時間割に位置付け、チーム数学科として、共通理解を図りながら協働的な授業を進めた。

	1組	2組	3組	4組
3年	2学級を3コースに再編成 (教師A、教師B、教師C)		2学級を3コースに再編成 (教師A、教師B、教師C)	
2年	3学級を4コースに再編成 学年数学(教師A、教師B、教師C、教師D)			
1年	3学級を4コースに再編成 学年数学(教師A、教師B、教師C、教師D)			

- 少人数指導を通して生徒の学力に応じた指導ができた。
- 経験豊富な先生との情報交換や教材教具の共有ができた。
- 進度をそろえるため、単元ごとに学習シラバスを作成して指導を行った。
- 教科部会を時間割に位置付けることにより時間的余裕をもった話し合いができた。

- 授業の進度が遅れる傾向にある。各コースの進度を合わせるため、授業者が時間をかけたいところなど自由に指導できない窮屈さがある。授業交換などが無理である。
- 共通理解をする上の事務処理の煩雑さ(評価資料、共通教材の準備)
- 基礎・基本が定着していないクラスで「学び合い」を構想しても時数が足りなくなる。

☆ 第1章 多項式 ☆		学	習	目	的	実	践	的	意	義	的	的	的
月日	時間	1 前多項式の計算	学習内容	準備	準備	準備	準備	準備	準備	準備	準備	準備	準備
3年													
	1	①多項式と単項式の乗除	・分配法則										P.9～11
	2	②多項式の乗法	・展開										P.11～13
	3	③乗法公式	・公式1										P.14～15
	4		・公式2～4										P.16～17
	5		・色々な式の展開										P.18～19
	6		・問題練習										～P.19
	7	*基本の問題	→P.19										P.20 基本の問題
	2	④因数分解											
	8	①因数分解	・共通因数										P.21～23
	9	②公式を利用する因数分解	・公式1*										P.24～25
	10		・公式2～4*										P.25～26
	11		・色々な因数分解										P.27
	12	*基本の問題	→P.27										P.27 基本の問題
	13	③式の計算の利用	・数や面積										P.29～30
	14		・問題練習										P.31～32
	15	*章のまとめ	・章の問題										P.33 章の問題解説
	16		・まとめ										学習プリント
空欄の反省													

- 授業内での生徒指導が難しく、担当学年全員に関われないもどかしさがある。

② 「授業スタンダード」の活用について

学習指導案には授業スタンダードの関連項目を明記し、課題意識をもちながら授業実践に取り組んだ。

- 現職教育の重点項目とリンクさせ、学校全体で取り組むことができた。
- 研究授業などのときは大いに活用できているが、全ての先生が日常の授業で意識するまでには至らなかった。

③ 推進教師の具体的な取組について

校内での研修だよりはもとより、推進地域での情報共有を図るため、小学校パイロット校と協力し、研修だよりを発行した。

- 本校の取組を研修だよりを通して、推進地域に紹介することができた。

- 発行はできたものの、研究内容を共有化できるよう深める必要がある。

④ 教師同士の学び合いの充実について

授業研究会での事後研究会に秋田式のスタイルを取り入れ、主体的で対話的な話し合いを行った。また、略案形式による互見授業を実施し、教科、学年の壁を越え、気軽に参観できる体制をつくり、先生方が互いにアドバイスできる環境を整えた。



前半の班別協議後、後半の共通課題テーマを決定する

- 事後研究会の班別協議スタイルが定着してきた。
- 授業を互いに見合うことで、指導観を深めたり、新しい発見ができたり授業改善の意識が高まった。
- 気軽に授業提供、参観する意識までには至っていない。指導案作成や準備の時間の確保が難しい。

(2) パイロット校Ⅱ(釀芳小学校)の取組について

本校では、研修主題を「主体的・対話的に深く学ぶ児童の育成」とし、副主題に「教科担任制・『授業スタンダード』の活用と子どもが深く学ぶ姿の見取り」として授業研究を実施してきた。

① 指導体制の確立について

本校では、教員の専門性を生かした教材研究とより質の高い授業を達成するために、次のような教科担任制を一部導入した。

	5年1組	5年2組		6年1組	6年2組		4年1組	4年2組
算数T1	推進教師		教務	理科の授業を担当		教務	図工の授業を担当	
算数T2	1組担任	2組担任	推進教師	5年1組	5年2組		3年1組	3年2組
				理科の授業を担当		教頭	書写の授業を担当	
音楽専門の教師 (6の2担任)	6年1組	6年2組	かやの実(的)の(実)の(情緒)合同 かやの実担任	自立活動の授業を担当				

② 『授業スタンダード』の活用について

- 「スタンダード&チャレンジ」→『授業スタンダード』に基づく共通実践
「スタンダード」…構造的な板書、自分の思いを分かりやすく記録するノート指導
「チャレンジ」…「教師のコーディネート」を重視した授業づくり
- 「学びの履歴」の活用→子どもの学びの連続性を保障し、「教師のコーディネート」を補完する。

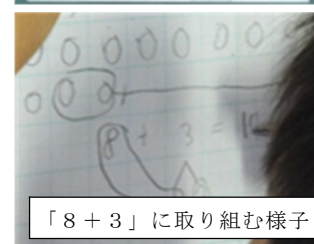
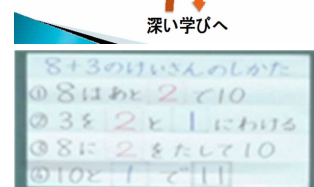
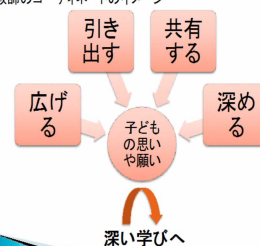
③ 推進教師の具体的な取組について

- 推進教師は、研修主任を兼任し、現職教育を推進した。
- 研修だよりを適宜発行し、「学びのスタンダード」の視点を発信した。
- 5年の算数科の授業では、推進教師が家庭学習も担当し、授業の補充と学力の定着を図った。

成果と次年度に向けて

- 「学びの履歴」を基にした教師のコーディネートの意識が高まり、課題に主体的に向き合い、考えをつなぐ子どもの姿が見られるようになった。
- 授業における教師のコーディネートを「引き出す」「広げる」「共有する」「深める」の4つの観点で整理し、授業のあらゆる段階で行われるものと考えた。
- 1年算数科「たし算」では、「8+3」の学習課題に取り組む中で、教師が考えを「引き出し」「広げる」ことで、子どもが「10のまとまり」の大切さに気付いていく場面が見られた。子どもたちは既習事項を生かし、「8+3」の計算をブロック操作やさくらんぼ計算などで取り組んだ。「3を2と1に分けるのはなぜか？」と問い、考えさせることで、「10のまとまり」をつくると計算しやすいこと、速く、正しく計算できることのよさに気付かせていった。
- 教師が「授業スタンダード」の視点到気付き、具体的な子どもの姿を基に話し合う姿が見られた。事後研究会を通して教員相互の研修、自己研鑽の意識が向上した。
- 汎用的な資質・能力と単元や本時のねらいを関連付けた単元構想と、教科の特質に応じた教師のコーディネートのあり方を追究する。

教師のコーディネートのイメージ



2 推進協力校の取組内容

(1) 教科担任制の取組

① 小規模校における教科担任制

教頭・教務がそれぞれの得意教科等を分科で担任し、専門的な知識をもって授業を

実施した。子どもたちは「〇〇（教科）の先生」として信頼し、分からないことも聞いて確かめる意識が高まった。また、専科としての意識が各教員の中に芽生え、事前の教材研究に力が入ってきている。

(2) 「授業スタンダード」チェックシートの活用

- ① 項目を記号化して指導案に掲載し、「授業スタンダード」との関連を意識化した。
- ② 事前アンケートとして活用し、その結果から共同研究の項目を焦点化した。また、各自の本年度の取組の重点化に役立った。
各学期末や年度末にチェック項目を振り返り、授業改善に取り組んできた。

(3) 授業研究の実施による検証と振り返り

各協力校ともに授業研究をすべての学年で実施し、学校や個人の課題を克服する検証授業を実施した。めあてとまとめの整合性、効果的な教材の操作活動、話し合い、ICTの活用など、実践することで協働的に思考し、振り返ることで授業改善に生かしてきた。



個別支援の様子



操作活動の様子

(4) ペアやグループでの話し合い活動



グループでの話し合い

少人数での表現方法の話し合い



ジグソー学習でのグループ学習



自由な交流による話し合い

発達段階に応じた「話し合い活動」を累積し、相手に理解してもらえるように話す姿勢と、しっかり聞き取りようとする姿勢を培うように心がけたい。さらに、お互いの考えの違いに気付き、その理由を推察して伝え合い、腑に落ちるまで話し合えるように指導していきたい。互いの考えの素晴らしさに気付き、認め合う雰囲気が教室に漂い、子どもたちの目に輝きが宿る授業を目指していきたい。醸芳小学校の研究で示された「指導者のコーディネート力」が話し合いを深めると考え、日々研鑽を積んでいる。

3 成果と次年度へ向けて

(1) 成果

- ① 授業の構想から振り返り、次の構想まで、網羅的な「授業スタンダード」を基に各学校の研究のテーマと関連付け、教科担任制やタテ持ち、TT、習熟度別学習などの指導方法を実践・検証してきた。一つの教科に絞らず、様々な教科で実践することにより、子どもたちが集中して学習する姿が多く見られるようになってきた。
- ② 子どもたちの思考の深まりには、外的刺激（視点の切替、考えるヒントなど）が有効に働くことが必要である。教材との出会わせ方や適時行われる子ども同士の話し合い、それを仕掛ける教師のコーディネート力が鍛えられないと思うような成果は得られない。「子どもたちの視点から授業を見合う、授業を一緒に考える」教師集団が教科を越えてできつつあり、日常的に互見できる体制作りが重要であることを確認した。

(2) 次年度へ向けて

- ① パイロット校と協力校が協働して授業改善に取り組む体制づくりをさらに目指したい。規模や校種の違いはあるが、子どもたちが集中して課題解決に臨むようなめあて、発問、板書、話し合い、個別指導などの仕組を検証し、研究成果を共有したい。
- ② 「学びのスタンダード」推進事業のまとめとして、これまで研修してきた成果を各学校から洗い出し、中学校区のお便りとして共有したい。
- ③ 家庭学習スタンダードが目指している「自己マネジメント力」の育成をめざし、小・中学校のつながりを意識しながら授業と家庭学習の関連を図りたい。



友達のノートに書き込み、夢中になって説明をする生徒と聞き入る姿が見られたグループ学習（中学生）